

野球時代

寺田寅彦

青空文庫

明治二十年代の事である。今この思い出を書こうとしている老学生のまだ紅顔の少年であつたころの話である。太平洋からまともにはげしい潮風の吹きつけるある南国の中学校にレコードをとどめた有名なストライキのあらしのあつた末に英國仕込みでしかも豪傑はだの新しい校長が卒業したての新学士の新職員五六人を従えて赴任すると同時にかび臭いこの田舎いなかの中学に急に新しい文化の風が吹き込んで来た。その新文化の最も目ざましい表象として維新時代の夢のまださめ切らなかつた生徒たちの心に強い印象と衝動を与えたものはベースボール、フートボール、クリケット、クロケーそれからボートレースなどの新遊戯であつた。若く元氣

な生徒らの目にはどこかの別の世界から天下あまくだつて来たような法
学士、農学士、文学士の先生たちがシャツ一つになつて校庭で猛烈な練習をリードした。生徒らの目には世界が急に素量的に飛躍したように感ぜられた。そうしてさらに次にきたるべき時代への希望と憧憬とうけいといったようなものが封建期の子供らの頭の中に勢いよく芽ばえ始めたのであつた。

まいた種のうちでもクリケットやクロケーは風土に合わなくてじきにしおれて枯れてしまつたが、ベースボールとボートレースはのびのびと生長した。後者は器具の関係から学校に限られていたが、前者は当然校外にまでも伝播でんぱして行くべき性質のものであ

つた。町はずれの草原や冬田の上で至るところにまね事の野球戦が流行した。ベースには蓆の切れ端やぞうきんで用が足りた。ボールがゴムまり、バットには手ごろの竹片がそこらの畑の垣根から容易に略奪された。しかし、それでは物足りない連中は、母親をせびつた小銭で近所の大工に頼んでいいかげんの棍棒を手にいた。投網とあみの錘おもりをたたきつぶした鉛球を糸くずでたんねんに巻き固めたものを心しんとし 鞍なめしがわ皮——それがなければネルやモンパ——のひょうたん形の片を二枚縫い合わせて手製のボールを造ることが流行した。横文字のトレードマークのついた本物のボールなどは学校のほかにはどこにも見られなかつた。しかしこの手造りのボールがバットの頭にカーンとくる手ごたえは今でも当時の

健児らの「若かりし日」の夢の中からかなりリアルに響いてくるものの一つである。ミットなどは到底手に入らなかつた。この思い出を書いている老書生の左手の薬指の第一関節が二十度ほど横に曲がつてしまつたのはその時代の記念である。先日彼がその話をある友人に持ちだしたら僕もそうだといつて彼以上にいつそうひどく曲がつた薬指を見せて互いに苦笑した。

彼が高等学校にはいって以来今日まで通つて來た道筋はしかしスポーツの世界とはあまりにかけ離れていた。そうして四十年近い空白を隔てて再び彼の歴史のページの上にバットやボールの影がさし始めたのはようやく昨今のことである。

昨年のある日の午後、彼は某研究所にある若い友人を尋ねたが、いつもの自室にその人はいなかつた。そこらの部屋を捜しあるいたが、尋ねる人もその他の人もどこにも見えなかつた。おしまいにある部屋のドアを押しあけてのぞくと、そこにはおおぜいの若い人たちが集まつて渦巻く煙草たばこの煙の中でラジオの放送を聞いているところであつた。それはなんの放送だか彼にはわからなかつた。ただ拡声器からガヤガヤという騒音が流れだしている中に交じつて早口にせき込んでしやべつてているアナウンサーの声が聞こえるだけであつた。聞いてみるとそれは早慶野球戦の放送だとうのであつた。

彼はなんだかひどくさびしい心持ちがした。自分の周囲には自分の知らぬ間に自分の知らぬ新しい世界が広大に発展していく、そうして自分にもつとも親しい人たちの多数はみんなその新しい世界に生きている。そうとは知らず彼は古い世界の片すみの一室にただ一人閉じこもつていて、室外の世界も彼と同様に全く昔のままで動いているような気がしていたのである。ところが、すすけた象牙^{ぞうげ}の塔はみじんに碎かれた。自分はただ一人の旧世界の敗残者として新世界のただ中にほうりだされたような気がしたのである。

往来へ出て見ると、そこのラジオ屋、かしこの雑貨店の店先には道ゆく人がめいめいの用事を忘れて立ち止まり寄り集まつて粗

製拡声器の美しからぬ騒音に聞きほれている。それが彼には全くなんの意味もない風か波の音にしか聞こえないのである。小店員は自転車を止め、若きサラリーマンは靴ひもの解けたのも忘れ、魂は飛行機に乗つて青山の空をかけつているのであつた。彼は再びさびしい心持ちがした。

ことしの十月十三日の午後彼は上野へ出かける途中で近所の某富豪の家の前を通つたら、玄関におおぜいの男女のはき物やこうもり傘がさが所狭く並べられて、印綱纏しるしばんてんの下足番げそくばんがついていた。そうして門に向かつた洋風の大きな応接間の窓からはラジオの放送が騒然と流れだしていた。なるほどきょうは早慶野球戦の日であると思つた。それから上野へ行つて用を足して帰るまで、至る

ところにこの放送の騒音が追跡して來た。罪人を追うフュリーのごとく追跡して來た。そうして宅へ帰つてみると、彼の二人の女の子がやはり茶の間のラジオの前にすわり込んで、ここでも野球戦の余響をまき散らしているのである。いつたいおまえたちにはこれがわかるのかと聞いてみると「そうねえ」というあまり要領を得ない返事であつた。とにかくこの放送を聞くことは現代に生きる事の一つの要件であるかもしれないと思われた。

翌日の午後彼が大学正門を出て大急ぎで円タクに飛び乗ると、なんと思い違えたものか車掌がいきなり「どちらが勝ちましたか」と聞くのであつた。しかしそれが当然その日の早慶野球第三回戦

に関する問い合わせがあることが、車掌にも彼にも自明的であつたほどにそれほどに、その日の東京の空気には野球戦というものがいっぱいになつていたのである。彼は返事に狼狽ろうぱいした。そうしてそれに対してもできない自分を恥じなければならぬような気持ちさえしたのである。

彼の宅の呼び鈴の配線に故障があつて、その修理を近所の電気屋に頼んであつたのがなかなか来てくれなかつた。あとで聞いてみると、早慶戦のためにラジオの修繕が忙しくて、それで来られなかつたと言うのである。

野球戦の入場券一枚を手に入れるために前夜からつめかけて秋雨の寒い一夜を明かす勇敢な人たちの話は彼を驚かし感心させた。

そして彼自身の学問の研究にこれだけの犠牲を払う勇気と体力を失つた自分を残念に思われた。

慶應が勝つと銀座が荒らされ、早稲田が勝つと新宿が脅かされるという話も彼を考え込ませた。当時彼の読みかけていたウエルズのモダンユートピアに出てくるいわゆる「サムライ」はこういうスポーツには手をつけないことになつてゐるが、それはこの著者のユートピアにおける銀座新宿の平和の乱されるのを恐れたためかもしれないと思われた。

これらの経験はこの空想的な老学者に次のようなことを考えさせた。いつたい野球その他のスポーツがどうしてこれほどまでに

人の心を捕えるのであろうか。

野球もやはりヒットの遊戯の一つである。射的でも玉突きでも同様に二つの物体の描く四次元の「世界線」が互いに切り合うか切り合わぬかが主要な問題である。射的ではのが動いているだけに事がらが複雑である。止しているが野球ではのが動いているだけに事がらが複雑である。
糊^{のり}べらで飛んでいる蠅^{はえ}をはたき落とす芸術とこの点では共通である。

近ごろボルンが新しい統計的物理学の基礎を論じた中に、ウイ
ルヘルム・テルがむすこの頭上のりんごを射落とす話を引き合い
にだした。昔の物理学者らが一名を電子と称するテルの矢のねらいは熟練と注意とによつて無限に精確になりうると考えたに反し

て、新しい物理学者は到底越え難いある「不確定」の限界を認容することになった。いわば昔はただ主観の不確定性だけを認めて客観の絶対確定性を信じていたのが今では不確定性を客観的実在の世界へ転籍させた。この考え方の根本的な変遷はいわゆる「因果律」の概念にもまた根本的な変化を要求する。しかしそれは単に原子電子の世界に関する事ばかりでなく、これらの原子電子から構成されているすべての世界における因果関係に対する考え方の立て直しを啓示するよう見える。

いかに現在の計測を精銳にゆきわたらせることができたとしても、過去と未来には未広がりに朦朧もうろうたる不明の筮縁ささべりがつきま

とつてくる。そうして実はそういう場合にのみ通例考えられてい
るような「因果」という言葉が始めて独立な存在理由を有すると
いうことには今までおそらくだれも気がつかなかつたのではない
か。

こういう漠然^{ばくぜん}たる空想をどこまでもとたどりたどつて行つた
末に、彼は、確定と偶然との相争うヒットの遊戯が何ゆえに人間
の心をこれほどまでに強く引きつけるかという理由をおぼろげな
がら感得することができるような気がした。同時に物質確定の世
界と生命の不定世界との間にそびえていた万里の鉄壁の一部がい
よいよ破れ始める日の幻を心に描くことさえできるような気がし
たのである。

その曲がつた脊柱^{せきちゆう}のことくヘテロドックスなこの老学者が
ねずみの巣のような研究室の片すみに、安物の籐椅子^{とういす}にもたれて
うとうととこんな夢を見ているであろう間に、容赦なく押し寄せ
る野球時代の波の音は、どこともない秋晴れの空の果てから聞こ
えてくるであろう。そうして、午後の茶をのみながら、彼と研究
をともにする若い学者たちに彼のしなびた左の薬指の第一関節に
おける約二十度の屈曲を示し、「僕だつてそなばかにしたもので
もないよ」、そんなことをいつては皆に笑われながら、三十余年
前の手製のボールのカーンとくる手ごたえを追憶しているであろ
う。

「白熱せる神宮競技」。「白熱せる万国工業会議」。こういうトピックで逆毛立つた高速度ジャズトーキーの世の中に、彼は一八五〇年代の学者の行なつた古色蒼然そうぜんたる実験を、あらゆる新しきものより新しいつもりで繰り返しているのであろう。そして過去のベースを逆回りして未来のホームベースに到着する夢を見ていることであろう。

青空文庫情報

底本：「日本の名隨筆 別巻73 野球」作品社

1997（平成9）年3月25日第1刷発行

底本の親本：「寺田寅彦全集 第五巻」岩波書店

1961（昭和36）年2月

入力：もつみつじゅんじ

校正：多羅尾伴内

2003年4月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

w.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

野球時代

寺田寅彦

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>